

# 社会科の主張

## 1 教科で育みたい人間像

5 私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」と考える。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりであり、「社会的事象」とは、社会における現在や過去の人々の営みのことを指す。

10 SDGsの考え方の広がりやAI時代の到来など、人々の生活や社会が変化の中で、新たな価値観が生まれ、変化の激しい時代を迎えている。多様性を認め合う動きがある一方で、価値観の違いから対立が表面化し、合意を導き出すことが困難な状況も見られる。そのような状況であっても、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくために、他者が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人々にとって最善の結論を導き、実現を目指し行動しようとするのが大切だと考える。

15 様々な社会的事象についてふれ、空間的、時間的な視点から考えることを通して、そのよさや問題点、またはそれに携わる様々な人々の考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求することを、社会科の授業で実践している。私たちは、このような営みを授業で巻き起こすことを通して、単に社会に適応して生きる人ではなく、よりよい社会のあり方を追求し続ける「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。

## 2 教科ならではの文化

20 「社会科ならではの文化」とは、「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会のあり方』を創りあげていく営み」ととらえている。価値観や考え方の違いが表面化しやすい現代社会だからこそ、様々な視点や立場から物事を考え、多様性を尊重しながらすべての人にとって最善の結論を導き出そうとする営みに参加することが大切である。

25 このような営みを巻き起こすためには、一人一人が社会の問題を自分の問題としてとらえ、よりよい社会像を追求することが必要不可欠である。そして、誰にとってもよりよい社会を創るためには、多様な他者とかかわりながら、最善の結論を見出そうとしなければならない。多様な他者とかかわる中で、自分だけでは気づくことができなかった視点からとらえたり、異なる立場に立って考えたりすることで、公正な判断や、より合理的な結論を導くことができる。その過程で対立や解釈のズレが生じることもあるだろう。そのような場合には、考えの根拠や互いの価値観について語り合い、相手の見方や考え方に対する理解を深めることで、互いが納得できる社会の姿を創りあげたり、新たな社会の姿を見いだしたりすることにつながる。また、互いの価値観を尊重し合うことで、共生していく社会の姿にたどり着く場合もある。

30 以上のような「社会科ならではの文化」に浸り、その経験を重ねた子どもたちは、自分に何ができるのかを真摯に考え、実際に行動したいという思いをもつことができるだろう。

35

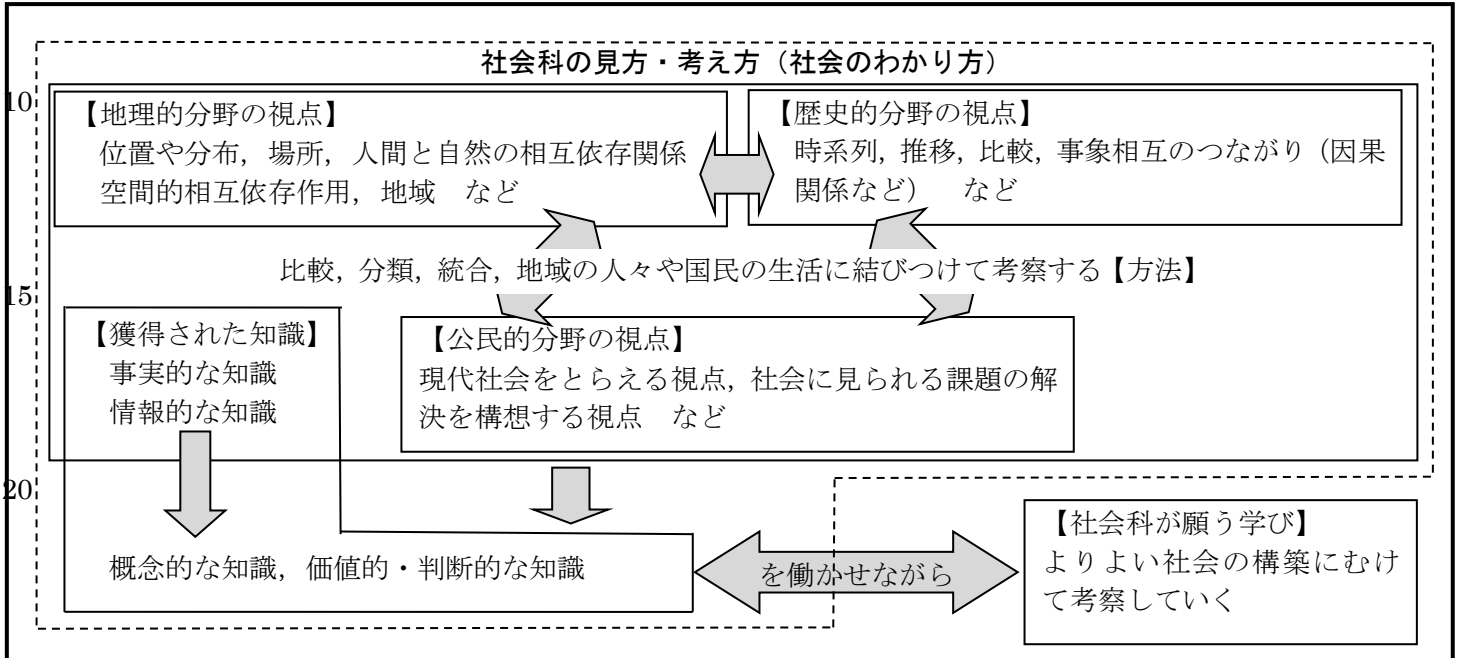
40

45

### 3 願う子どもの学び

5 社会科が願う学びは、課題解決のための選択・判断に資する知識・概念や理論などに気づき、自分なりの考えをもちよりよい**社会の構築に向けて考察していく**ことである。考察するとは、子どもたちが様々な社会的事象を「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目してとらえることや、比較、分類したり統合したり、地域の人々や国民の生活と結びつけることである。

「社会科で願う学び」イメージ図



25

そこで、私たち社会科は、以下のような授業づくりを大切にしている。

(1) 現実の社会と自分とのつながりを感じられるような題材を開発すること

30 社会的事象に出会ったときに「なぜだろう」「解き明かしてみたい」という思いをもてるような出会いが必要である。さらに様々な社会的事象を自分事としてとらえ、「私にも関係があるかもしれない」という思いを抱くことが欠かせない。その一つの手だてとして、ねらいを明確にしたうえで、授業構想の中に、地域の人材を活用することや扱う社会的事象に関わる方の話を聞く場面を設定する。

(2) 本質にせまる問いを生み出すこと

35 自分とのつながりを感じた子どもたちは、解き明かしたいと思える問いが生まれてくるだろう。そこで共有された問いは、多面的多角的に追求できるものである。そして、追求する活動を通して解釈の違いやズレに気づき、価値観について語り合うことにつながる「新たな問い」が生まれてくるだろう。「新たな問い」とは、その題材で得た、様々な視点や立場を生かして、最善の社会のあり方にせまるような問いだと考える。「新たな問い」について追求することを通して、題材や社会の本質にせまる学びを生み出したい。

(3) 子どもたちが視点を明確にして、多面的多角的に追求していけるような構想上の手だてをうつこと

40 子どもたちの多様な発言やあらわれをいつ(タイミング)、何を、どのように焦点化し、問いの解決に向けて対話を促進する手だてをうつことである。そして、子どもたちの対話によって、よりよい社会の姿を創りあげる場面では、単に社会的事象を説明したり、評論したりするだけに留まらないように、授業者は解釈のズレや価値観の違いが焦点化されるように子どもたちとかかわり、さらなる対話を促進し、考えの根拠を互いに理解できるようにする。

45 私たち授業者も社会に参画する一人の仲間として、社会を創りあげる営みに参加していきたいと思っている。